

定食屋「ひがわり」 第2
話 五月晴

神江 京

ゴールデンウィークも過ぎ、街が初夏の暑さになってきたその日、須田常彦は額ににじむ汗を拭き拭き、重いカバンを提げて歩いていた。雨を含んでいるともいないとも判らない灰色の雲が青空にかかって、蒸し暑さを呼びこんでいる。

須田は先日、四十路に入ったばかりのサラリーマンだ。結婚が遅かったので、まだ保育園に通っている小さい子どもが2人いる。

先ごろまで勤めていた会社が、折からの不況で早期退職者を募集していたので、満額ちかい退職金が貰えることもあって、妻とも相談した結果、転職することにした。

いま勤めている会社は、その転職先だ。

大学時代の先輩の伝手で見つけた会社で、この4月から働いている。今までの技術職とは畑の違う営業職だが、技術職に就いているあいだに身につけた知識が信用されるのか、訥々とした話しかたが好感を持たれるのか、それなりに客先を見つけることができていた。先輩からの信頼度も上々で、この分なら昇給も近そうだ。

だが、須田自身は、最近とみに疲れを感じ始めていた。

営業職そのものについては、さして文句はない。無理をせず、自分の持っている知識を解りやすく説明するだけで、それなりに相手も理解してくれるからだ。これは須田の先天的な才能のひとつなのだが、本人はそのことを理解していなかった。

だが、自分が人と接することそのものを苦手としていることは理解していた。

営業の仕事にしても、自分の専門分野に関することだから何とか話せているものの、やはり初対面の人と話をするたびに緊張するし、話の枕に軽い世間話でも……と思ったところで、なかなか思いつかない。妻は、

「あなたのそんなところが、かえって信用されるのよ。口が軽いのって、良し悪しだもの」

などと慰めてくれるが、須田にとって、自信の裏付けにはならなかった。

今日も新しい客先に顔を出してきたのだが、相手の担当者が難しいタイプで、最初の挨拶から「むすっ」としたまま、名刺を交換しても表情ひとつ変えない。須田が名乗っても「ああ」と応えるだけで顎をしゃくったところを見ると、名刺を見て名前を憶えろ、ということなのだろう。

確かに、相手はお客様だし、須田は話を聞いてもらう側には違いないのだが、そういう態度を取られると、自分が何か失礼をしたのではないかと心配になってしまうのが、須田常彦という男なのだ。

明日も訪問する約束を取りつけてはきたのだが、まともに話を聞いてもらえる自信はなかった。

「何から話したものかなあ……」

須田が力なく独り言をもらしたとき、それに応えるかのように、腹の虫が「ぐきゅう」と鳴いた。腕時計に目を落とすと、気づかぬうちに昼を回っていたようだ。

「腹が減っては戦ができぬ、と言うからな。とりあえず、何か食うとするか」

自分を力づけるように呟いた須田は、きょろきょろと周囲を見回した。

技術職に就いていたころは、社内に常駐していることが判っていたから、妻が手作りの弁当を持たせてくれていた。しかし、営業職となってしまうと、落ち着いて弁当を開く場所や時間が取れるとは限らないので、どうしても、そのへんの店で昼食を摂ることになる。社に帰れば、安価な社員食堂があることは判っているが、ここから社に戻り、また午後の営業にでるのは、いかにも億劫な話だった。

「このへんは小洒落た店が多いからなあ……俺でも入れるような店って、あるだろうか？」

あまり土地勘がない場所だから、どの店が安くて美味しいのかが判らない。ファーストフードで済ませるという手もあるが、四十男が昼休みにハンバーガーというのは、自分でも如何にも侘びしくて、どうもその気になれなかった。

「定食屋でもあれば良いんだが……」

そう呟いたとき、一本の路地から女性が出てくるのを見かけた。今風のファッションに身を包んだ、若くて可愛らしい女性だ。その女性の表情が、いかにも満ち足りているのを見て、須田はふと、その路地に入ってみようか、という気になった。

一步、足を踏み入れると、オフィスビルに挟まれた裏路地は、なんとなく薄暗いように感じる。その薄暗さのなかに、ぽつりと白い看板が出ていた。

定食屋『ひがわり』

確かに、そう書いてある。

「へえ……こんなところに定食屋ねえ……」

須田は興味を抱いて、その店の引き戸をからからと開けた。

「いらっしゃいませ。お一人様でしたら、カウンターへお願いできますか？」

やわらかな女性の声が、そう言って須田を迎えた。

店内を見渡すと、左側に据えられた4人掛けのデコラのテーブルも、右側に細長く伸びたカウンターも、ほぼ満席の状態だ。“定食屋”と看板にあったわりには、その種の店にあるような、おかげの入ったガラスケースや、セルフサービスのお茶のポットも置いていない。

「失礼します」

須田は、そう挨拶して、カウンターの端に空いていた席へと身を滑りこませた。

「はい、どうぞ」

隣の席にいた若い女性が、にこにことうなずいた。自分の前に置いてあった皿や茶碗を引き寄せて、須田の前のスペースを広くしてくれる。

「あ……こりゃ、すみません」

恐縮して頭をかく須田に、

「いいんですよ～」

と、女性は微笑んだ。

「わたしは、そろそろ たべおわりますから」

女性の言葉に、

「なんだよ、鳴瀬。おかわりしないのか？」

とカウンターの中から声がかかった。声の主は小柄な男性で、どうやら一人でカウンターの中を切り回しているらしい。

「え〜？ だって、もうおなかいっぱいだよ。それに、わたしばっかりおかわりしたら、ほかのひとのぶんがなくなっちゃうんじゃない？」

そう言いながらも、女性は名残り惜しそうに皿の上に残った揚げ物と思しき料理をつついて

いる。

「大丈夫よ、はつみがおかわりするぐらい」

最初に案内の声を投げてくれた女性が、須田の傍らへ来て言葉を添えた。

それから、須田のほうに向きなおる。

「いらっしゃいませ。本日の定食は、三種のお豆のかき揚げに、鶏肉とレタスのサラダ—こちらは、胡麻味か玉葱風味、2種類のドレッシングからお選びいただけます。それから、ハチクと若布の煮物に芹の清し汁、五穀米のご飯。以上で700円になります」

そう言って一本の三つ編みを背中に流した女性は、にこっと笑った。丸い眼鏡が、表情に優しい雰囲気を与えている。

「え〜と……」きょろきょろと店内を見回した須田は、店に足を踏み入れたときから、気になっていたことを尋ねた。「定食以外のメニューってというのは—」

「当店のメニューは『日替わり定食』のみとなってるんです」眼鏡の女性は申し訳なさそうに応えた。「そのかわり、その日の市場で、いちばん美味しい素材を板前が自分で選んできておりますので、試してみてくださいませんか？」

「そうなんですか」

須田は自分でも気づかなかったが、ちょっと嬉しそうな表情になった。もともと野菜が好きなのだが、外食で野菜をたくさん摂るのは至難の業だ。しかし、さっき眼鏡の女性が並べてくれた定食の素材には野菜が多かった。なかなか楽しい昼食になりそうな予感がする。

それでも須田は、女性の説明のうちで引っかかっていた言葉があったので、それを確かめるために口を開いた。

「あの……『ハチク』って何です？」

「筍の種類ですよ」

答えたのは、カウンターの中の男性だった。察するに、彼がこの店の板前であり、たった一人の料理人なのだろう。

「漢字で“淡い竹”と書くんです。筍って一口に言いますが、時季によって違う種類のが出回るんですよ。こないだまでは孟宗竹が出てたんですが、今日は淡竹の子の良さそうなを見かけたので、そっちを若筍煮にしてみました」

「へえ〜……」

須田は驚いた。若筍煮は好きな料理の一つだが、入っている筍が時季によって違う、などとは考えてみたこともなかったのだ。

「それじゃ、三種の豆っていうのは——」

「そらまめ、グリーンピース、スナックえんどうの3しゅるいなんですって。わたしもさっき、はるたくんにきいたんです」

答えたのは、須田の隣に座っていた女性だった。

春田と呼ばれたカウンター内の男性は、黙ってうなずくと、女性——鳴瀬はつみ、というらしい——の皿に、揚げたてのかき揚げを置いてやった。

「わあ、ありがとう、はるたくん！」

喜んで食べ始める鳴瀬を笑顔で見つめてから、眼鏡の女性が、

「どうなさいますか？」

と尋ねてきた。

「あ、それじゃ定食をお願いします」

「ありがとうございます。おしぼりとお茶は、熱いのと冷たいのと、どちらになさいますか？」

「両方とも熱いので……」

「かしこまりました。少々お待ちくださね」

女性が奥へ去っていくのを見送って、須田はあらためて店内を見回した。須田のようなサラリーマン風の客が最も多いが、学生風のカップルや須田の隣に座っているようなOLもいる。

『知る人ぞ知る店って感じなのかなあ』

もの珍しげに店内を見回している須田のことが気になったのだろう、隣に座っていた鳴瀬という女性が、

「このおみせ、はじめていらしたんですか？」

と話しかけてきた。

「え？ ああ、そうです。偶然、通りかかったら、看板が目についたので入ってみたんですよ」

須田は、自分の娘と云っても良い年頃の相手に対して丁寧に応えた。相手の人懐こい笑顔が、自然にそんな答えを引き出したのかもしれない。

「おじさま……は、しつれいですよ。すみません、わたし、なるせはつみといいます。よかったら、おなまえをおしえていただけますか？」

言いながら、鳴瀬はつみは膝に置いていたポシェットから素早く名刺を取りだして、須田にさし出してきた。須田でも名前を知っているような大手企業の秘書室所属という肩書きが、今の須田には眩しく見える。

「あ、遅れました。私、こういうもので——」

須田も胸ポケットから名刺を出して、鳴瀬に渡した。

「すださん、とおっしゃるんですか。おつとめさきは『こずみっく・こーぼれーしょん』……あ、さいきん、あたらしいデータベースのマクロかいはつにせいこうされたっていう、ベンチャーきぎょうですよ。すごいところに、おつとめなんですよ！」

鳴瀬は、きらきら光る目で須田を見つめてきた。その視線に純粋な尊敬の色があるのを見て、須田は照れくさくなって目を逸らしてしまう。

「いや、私が開発したってわけじゃありませんから……私は、それを売って歩く立場なんで、ご説明するのが関の山です」

「でも、えいぎょうさんで、ごせつめいまでなさるってことは、すださんも そのほうめんにおくわしいってことなんでしょう？ そこまでなさるのって、たいへんだとおもいますよ。おつかれさまです」

鳴瀬は、にこにこと言った。

「はつみ、よく知ってたわね。そんなコンピュータ関係の話」熱いお茶とおしぼりを運んできた眼鏡の女性が、感心したように言った。「あんたは、そういうことって興味ないかと思ってた」

「うん、こないだ、たつやくんに あったとき、おしえてもらったの。すごく つかいやす そうなシステムだから、たつやくんのかいしゃでも つかおうって なったんだって」

「へえ～……達也も、そういうソフトの導入決定権を持つぐらいになったのか」

カウンターの中から若筍煮の小鉢を須田の前に出し、春田が呟いた。

「あの、失礼ですが、達也さん、とおっしゃるのは、銀行員の——」

礼を欠いた行為と知りつつ、須田は三人の会話に割って入ってしまった。

とある銀行に売りこみに行ったとき、ソフトの細かい部分まで突っ込んだ質問をしてきながらも、その問いかけが的確で、感心させられた若い男性がいたのだ。その男性の名前が、たしか「東雲達也」と云ったように記憶している。

「そうですよ」眼鏡の女性が愛想よく応えた。「達也は銀行勤めで、はつみも、カウンターにいる春田くんも私も、同じ中学の出身なんです。今でも、よく会うし、このお店にも来てくれるんですよ」

「そうだったんですか」

須田は若筍煮に箸をつけながら、うなずいた。

「でも、よく判りましたね」春田が呟いた。「サラダのドレッシングは、胡麻と玉葱、どちらになさいますか？」

「あ、玉葱をお願いします」

「はい、どうぞ」

手早くサラダを和えた春田が、涼しげなガラス鉢を須田の前に置いた。

口中に広がる筍の香りにうっとりしていた須田は、慌てて片手を挙げて会釈した。筍でいっぱい口を開くことは、とてもじゃないが出来なかったのだ。

だが、春田にとっては、須田のそんな様子が、かえって嬉しかったらしい。無愛想な顔が、ちょっとだけ微笑んだ。

「すぐ、揚げ物もお出ししますから」

そう言うと、カウンターの奥の油鍋に向かう。

「いや、東雲達也さんとおっしゃいましたか、そのお友だちのかた。実に、よく物を知ってらして……正直、私のような、にわか営業マンの売りこみでは失礼なんじゃないかと思ったぐらいなんですよ」須田は、春田の背中に向かって言った。「なのに、私なんぞの説明をきちんと聞いてくださったうえ、社内のかたに噛み砕いて説明していただきって。おかげでソフトを納入させていただくことになったんです。本当に、ありがたいお客様でしたから、きっと、あのかたのことだろうな、と」

「どうしてですか？」鳴瀬が、きょとんと首を傾げる。「たつやくんがありがたいと、どうしてわたしたちのともだちだってわかるんですか？」

「それは――」

須田は、ふと答えに詰まった。何故、と具体的に問われても、自分でも回答は判らない。

「あ、ごめんなさい」鳴瀬は慌てたように頭を下げた。「わたし、へんなコト、きいちゃいました」

「いや、いいんですよ」須田は急いで首を横に振った。「自分でも『何故だろう』って思ったら、なんだか気になっちゃって、考えこんでしまったんです」

そう言って頭を掻いた須田の前に、揚げたてのかき揚げの皿が、すっと差し出された。

「田中、こちらのお客様に清し汁と御飯を」春田の声に、眼鏡の女性がうなずいて動く。「たぶん……同じ匂いがしたんだと思います」

ぽつりと言った春田の言葉が、自分に向けられたものだとは最初、須田は気づかなかった。

「おなじにおい……って、どういうこと？ はるたくん」

鳴瀬が問いかけて、須田は初めて春田の意見が自分に対するものだったと気がついた。それと同時に、口のなかに広がるかき揚げの豆の香りが、この店に漂う居心地の良い雰囲気と似ていることにも気がついた。

客が全員、同じかき揚げを食べているから匂いが似ている、というわけではなく、嗅覚で感じるのとは違う部分で似ていると感じているのだ、ということにも。

「はい、どうぞ。お汁と御飯は、おかわり自由ですから、いくらでもお言いつけくださいね」

眼鏡の女性――田中は、ほっこりと湯気の上がるお椀を須田の前に置いて微笑む。

「文字どおりの意味」

春田は、それだけを答える。

鳴瀬の眉根が寄り、顔の周囲にたくさんの「？」が浮かぶのが、須田には手に取るように判った。

「ええ～?!」鳴瀬は、いよいよ不思議そうな表情になる。「はるたくんのいうこと、ときどきむずかしくってわからないよ？」

「鳴瀬さん、とおっしゃいましたね、お嬢さん」須田は、かき揚げの欠片を飲みこんでから口を開いた。「このお店に漂う雰囲気も、あの東雲さんというかたが持つておられた雰囲気も、当然お嬢さんが持つておられる雰囲気も、すごく似ているんですよ。何と云いますか――安心できる雰囲気なんですね」

「ええ〜?!」鳴瀬が、二度目のビックリ声を上げる。「はるたくんや、たつやくんとは、ぜんぜんちがいますよ、わたし。おりょうりもヘタだし、あたまもよくないし、おっちょこちょいだし、しゃべるとひらがなだし……」

「いや、そのクセはもう直らないと思うわ」

田中が小さくため息をついてツッコミを入れたが、鳴瀬は意に介する様子もない。

「落ち着け、鳴瀬」春田が腕組みをして言った。「似てるのは、あくまでも“雰囲気”だ。おまえが板前に向いてるとか、達也なみの頭脳を持ってるとかって意味じゃない」

「そうですよ」須田は、五穀米の素朴な美味しさを噛みしめて、うなずいた。「こちらの存在を受け入れてくれると云いますか……そんな感じです。実は私、営業マンとしての自分に自信を無くしかけてたんですが、東雲さんにお会いして、ちょっと気持ちを盛りかえしてたんですよ」

「……そのわりに、先ほど店に入ってきたときには、お疲れの様子でしたね」田中が、ぬるくなったお茶の湯呑みを熱いものに取り替えて微笑んだ。「ここの定食を食べて、また元気になってもらえると嬉しいんですけど」

須田は苦笑した。

昼前に会った新規の客のことでヘコんでいるのを、他人に見抜かれるほど情けない顔をしていたのか、と思うと、気が滅入ってくる。

「ねえ、すださん」食後のお茶を飲んでいた鳴瀬が呼びかけてきた。「このおみせのゴハン、わくわくするほどおいしいでしょう？」

「ええ、そうですね」お世辞でも何でもなく、須田は素直に答えた。「口に入れて、噛めば噛むほど素材の味が滲み出てくるようです」

「だったら、すださんのおしごと、きっとおいしくなりますよ」

今度は、須田が目をぱちくりさせる番だった。鳴瀬が自分のことを励まそうとしてくれる気持ちは伝わってくるのだが、彼女の言う言葉の意味が理解できない。

それを鳴瀬に確かめようとしたとき、相手は腕時計を見て、

「わあっ！」

と声を上げた。

「あれ、もうそんな時間？」

壁の時計を見上げた田中が、驚いたように尋ねる。

「きょう、ごごからじゅうやくかいぎがあるの。しりょうならべたり、おちゃのじゅんびしたり、いろいろあるから……ごめんね、はるたくん、ひろえちゃん、チケットまだあるよね？」

「ああ」

壁に貼ってある何本もの細長い紙を見やって、春田がうなずいた。どうやら、この店には、コーヒーチケットならぬ“定食チケット”が存在しているらしい。喫茶店のコーヒーチケットだと、10杯分の価格で11枚つづりの回数券になっているのが普通だが、定食屋では一品の単価が高くて、そこまでオマケはできないだろう。せいぜい、一食分が5%安くなるぐらいの割引率だろうか——と、須田の営業脳は思わず考えてしまう。

「じゃ、1まいきつといてね。それから、すださん」突然、呼びかけられた須田は「はいっ?!」と居ずまいを正した。「おはなしにあったデータベース、うちのかいしゃでもやくにたつかもしれません。よろしければ、わたしからたんとうのものをしょうかいしますから、おじかんのあるときにでも、さきほどのめいしのところへれんらくをください。よろしくおねがいします」

そう言うと、鳴瀬はぺこりと頭を下げ、風のように店を飛び出していった。

「鳴瀬がああ言うんだから、ほぼ間違いなく仕事は取れるでしょう。前祝いに、かき揚げのおかわりはいかがですか？」

春田がカウンターの中で、にんまり笑ってみせた。

「あ……はい、いただきます」

須田がうなずくと同時に、春田は、ぴちぴちと気持ちのよい揚げ物の音をさせ始めた。

「お汁も熱いのに代えますね。ご飯のおかわり、どうされますか？」

阿吽の呼吸で、田中が尋ねる。

「あ……はい、お願いします」

春田に尋ねられたときと同様、ぼんやりと答えてしまってから、須田はハッと我に返った。さっき受け取った鳴瀬はつみという女性の名刺に視線を落とす。飛びこみでは、まず受けつけてもらえないであろう大企業の名前が、燦然と輝いて見えた。

「確かに、おいしい仕事にはなりそうだが……」

思わず呟いた須田の前に、熱々の湯気を上げるお椀を置いた田中が、

「その仕事は、お客様ご本人が見つけれられたんですよ」

と言った。

「いや、私はただ、この店の看板を偶然に見かけただけで——」

「こんな裏通りにある店、ご縁がなければ見かけてももらえないですよ」春田は、揚げたてのかき揚げを須田の皿に置く。「それだけでも、お客さんは運がいい——自画自讃になりますが」

そう言って、春田は頭を搔いた。

「いや、本当に運が良かったです。こんな美味しい昼飯を食えて、そのうえ仕事まで……午前中、なんかもう仕事がイヤになりかけてたことを思うと、嘘みたいですよ」

須田が正直な気持ちを言うと、春田と田中は顔を見合わせて、笑みを交わした。

「そう言っただけだと嬉しいです。このお店が、そういう場所になれたら良いなって、春田くんも、私も、思ってますから」

田中の言葉を聞きながら、須田は熱い清し汁の椀を持ちあげた。顔に当たる湯気が、午前中に会った気難しい客のせいで固まった頬の筋肉をほぐしてくれるような気がする。

それと一緒に、胸の奥のどこかにあった、営業という畑違いの職種になってしまったことへの無念さや、今までとは違った種類の仕事に対して感じるプレッシャーといったものが、雪が溶けるように柔らかくなり、動きだし始めたのが判った。無念さは挑戦心に、プレッシャーは期待に、それぞれ変わっていくようだ。

「食べることって……大事なんですねえ」

須田は、しみじみと言ってしまうから、ハタと気づいて汁椀から顔を上げた。心で思っただけのつもりの言葉が、思いのほか、大きな声で外に出てしまっていたのではないかと思ったからだ。

「そう、大事なんですよ」春田は須田の思いを、素直に肯定してくれた。「だからこそ、この店は、ひがわりの定食を出すんです。昨日とは違う今日、今日とは違う明日——それをお客さんが見つけてくれるように、ね」

「ありがとう」須田は、五穀米を噛みしめて礼を言った。「本当に……なんだか気分がスツとしてきました」

「良かったです、そうしてもらえて」春田は満足そうな笑顔になる。「でも、その気分も、鳴瀬のところの仕事も、お客さんが自分で手に入れたものなんですよ。それを忘れちゃいけません」

須田は黙ったまま、春田の言うことを聞いていた。

毎日あくせく働いていた自分が馬鹿馬鹿しいとは思わないが、そこまで肩肘を張っていなくても良かったのかな、ぐらいには思えるようになっている。

昼飯を食べ終わったら、もう一度、さっきの客先を回ってみよう、と須田は思った。こちらが緊張していたから、相手も緊張していたのかもしれない。今の自分なら、うまい昼飯を食べたことをキッカケに、あの難しそうな相手とも普通に話ができそうな気がする。

「ごちそうさま。おいしかった」

米粒ひとつ残さずに定食を食べおえた須田は、きちんと手を合わせて挨拶した。

「ありがとうございます。お粗末様でした」

春田と田中が声を揃えて言った。

「先ほど、鳴瀬さんがおっしゃってた“定食チケット”というのは、おいくらなんですか？」

財布から小銭で700円を出しながら、須田は尋ねた。

「10枚つづりで6500円。20枚つづりだと12000円、とお得になってます」田中がにこにこしながら答えた。「よろしかったら、ご利用ください」

「今お邪魔してる会社との案件がまとまれば、きっとボーナスが出ますから、そしたら20枚つづりを買って、通わせてもらいます」須田はカウンターに小銭を置いて笑いかえした。「本当に、ごちそうさま。元気が出ました」

「またのお越しをお待ちしてますよ」

春田がうなづく。

「ありがとうございました――」

頭を下げる田中の声を背に外に出ると、ビルとビルの谷間から真っ青な空が覗いていた。さっきまで空を塞いでいた灰色の雲は、どこかへ行ってしまったようだ。

「よし、ひとつ頑張ってみるか！」

五月晴れの空に向かって宣言した須田は鞆を持ちなおし、足取りも軽く表通りへと出ていったのだった――。